

# 311子ども甲状腺がん裁判記⑦

白石 草 (ウェブメディア「OurPlanet-TV」代表)

18歳から28歳の若者7人が東京電力を提訴した裁判の様子を追います。

「がんになって、良かったくらいです」  
今から6年前になるだろうか。裁判の提訴よりはるか前、まだ20歳そこそこだったあおいが、私にこう語ったことがある。それを聞いた私はどう返せばよいかわからず、言葉に詰まったことを覚えている。

「311子ども甲状腺がん裁判」を支援している「311甲状腺がん子ども支援ネットワーク」は、裁判報告を兼ねたニュースレターを定期的に発行している。昨年10月10日に発行された第7号には、そのあおいが「裁判を通して病気を受け入れた私」という一文を寄せている。この文章を読んで、私はあの時のあおいの心情をようやく理解した。

「『もし、がんじゃなかったら』ってことは、もう数えきれないくらい悩んで、考えました。甲状腺がんになったことは、受け入れなくてはいけない現実のはずなのに、私はこれまで、どこか受け入れられてなかった部分もありました」  
あの頃あおいは、あまりに過酷な闘病と現実

に「がん」という自分の病気を受け入れられずにいたのだ。それだけでなく、同じ病気を抱えている人に会うことも怖かったという。  
しかし、このままじゃいけないと自分を奮い立たせて、同じ病気の子と初めて会った時のことも記している。会ってみると、自分と同じ普通の女の子。それでも、友達のようになんでも

話せるようになるまでには長い月日を費やした。なかなか打ち解けることが難しかった同じ病気の子との関係を変えたのは、裁判だった。

「私たち原告は、同じ時間を共有することによって、さらに仲間意識が生まれてきていると思っています」  
「今は、自分の運命から逃げないで、これからも、自分のために、他の甲状腺がんの子のために最後まで闘いたいです」

遠回りしながらも現実を受け入れたあおい。見違えるように明るい雰囲気となり、公判の日には、髪の毛を明るい色に染め、おしゃれをして駆けつけるようになった。

その裁判だが、今も東電側の反論が続いている。そして、3月6日と6月12日の公判で弁護団はいよいよ、原告一人ひとりの損害などを主張する予定だ。裁判は佳境にある。



裁判の様子を報告する「口頭弁論ニュースレター」。第1回口頭弁論を受けて、22年6月に初号が発行された。

## 7人の若者のダイアリー

みつぎ (25歳女性・写真も)

昨年7月、苗場で行なわれたフジロックフェスティバルのNGOヴィレッジに、甲状腺がん裁判について知ってもらうための展示ブースを出すことになり、私も手伝いで参加しました。でも、初めてで不安なことだらけでした。



輪投げが人気を集めた展示の様子。

一番の不安は虫。アブ、蚊、ブヨ、ヒルがすごく多いと聞いていました。実際いろいろな虫がたくさんいて、行ったことを後悔しました。設営準備も虫にビビって足手まといになってしまい、帰りました。今、思い出がたつたです。

しても、申し訳ないです。  
そしてイベント初日。自分が慣れたのか、お客さんが来て虫が減ったのかは分かりませんが、前日に比べればマシになりました。私たちのブースはお子様楽しめる輪投げ、的当て、じゃんけんクイズがあり、たくさん遊んでいただきました。イベントの期間中には、3日連続で遊びに来られる子や何回も遊んでくれる子たちがいて、とても癒やされました。私たちの活動に関心を持って来てくださった方もいて、その人数は私の予想以上でした。その方々にうまく話や説明ができたとは思えませんが、頑張りました。

